

## 『続明鳥』のかたち 夜半亭撰集論

著者	藤田 真一
雑誌名	國文學
巻	83-84
ページ	292-306
発行年	2002-01-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/2497">http://hdl.handle.net/10112/2497</a>

# 『続明烏』のかたち

— 夜半亭撰集論 —

藤田真一

## 一 奥付の意味

夜半亭の第三撰集『続明烏』は、ひと筋縄ではいかない俳諧書である。

蕪村の夜半門の撰集として、二重の意味を担わせられたつくりになっている。表の顔と裏のすがたをあわせ持っているかにみえる。それはしかも、どちらが表で、どちらが裏とにわかに見分けがたいような、ふしぎな二面性といつてよいものであった。手順として、下巻末尾、つまり最後尾から見えていくことにする。奥付はこうなっている。

安永丙申歳九月廿三日

几童書

校合 万容

彫工 白砧  
九湖

書林 橘仙堂善兵衛

吉田九郎右衛門

このなかに、注目すべき点がすでにいくつもある。第一に、年次と日付である。年は「安永丙申」、すなわち安永五年（一七七六）。そして、日付は九月二十三日、とりわけ「二十三日」が見逃せない。編者几童は、なによりこの日付に執心したはずである（後述）。

第二に、「几童書」という表記である。夜半亭の撰集で、これ以前になく、以後にも見えない署名である。思い合わせらるべきは、蕪村の没後一年に刊行された『蕪村句集』の冒頭にしるされている、「几童書」の語である。

似た例が、几童追善書『鐘筑波』（寛政元年序、紫峴編）の冒頭に掲出されている。それは、「夜半亭几童着（著）書」として、「其雪影」以下、十七部の書目を列挙したものである。「統明烏」もむろん含まれている。撰集ばかりか、「蕪村句集」もあれば、「手びき蔓」「遊子行」もあり、自身の句集「井花句集」（井華集）もある。全体としては、編著書というべき書目であった。

『蕪村句集』の「几童著」を、几童の版下清書の意とする説もある（新潮日本古典集成『與謝蕪村集』解説）。だが、一般には几童編を意味するとされている。正確を期するならば、清書をあわせた編集全般を言っていると考えてよいだろう。本書の奥付の場合、直接には版下書きをいうが、編集の意をもふくむ。右の「几童著書」全体も同様の理解でよいだろう。ただ、本書において、その「編」の内容については、精密な議論が必要である。

第三、校合および彫工の三名は、いずれも几童じしんの門弟に遇される人物である。また、相版の二書肆のうち、主たる版元は橘仙堂とおもわれる。橘仙堂は、几童の父几圭の代から誼みのつづく書肆であった（たとえば几圭編『はなしあいて』）。後年、善兵衛みすから几童門にあって、俳諧をたしなむようにもなった。

以上の概観でわかるように、奥付のしめす内容は、この書が几童門の、いわば身内で制作されたことを語っている。本稿においては、

『統明烏』が、編者几童を機軸としてつくられ、それが同時に蕪村門を代表する撰集になっているさまを論じたい。

## 二 「几圭十七回忌追善」

奥付からさかのぼって、丁を繰っていくと、さらに特筆すべき記事にゆきあたる。

諸ともに記念としのぶ紙衣哉

芳馬

と、まずこの発句があり、続けて、以下のような詞書と付句（脇）で始まる、几童の独吟連句（半歌仙）が収められている。

この句は、亡父が追悼にせうとの人の申出し也。今是に十  
七句の員（韻）を次、一折の俳諧となし侍りて、正当の日誦  
経の後、牌（牌）前に備へ、懐旧の意を述るものならし

十七年を饗の初しも

几童

このなかで、「せうとの人（兄）」だと書かれている芳馬については、右の文脈からみて、また几童が次男だとされることからして、几童の兄と考えてよいだろう。ただ、几圭の『はなしあいて』にも、また几童の撰集類にもいっさい見ない作者である。常時俳諧をこととしていたひとではないのだろう。

これに継いで十六句を加えて、あわせて十八句、半歌仙とした。脇以下の几童付句十七という数は、父几圭の十七回忌にちなんだも

のであることは疑いない。問題は、この企画がいつなされたかということである。「正当の日」とあるのが、最大の手がかりである。

新日本古典文学大系『天明俳諧集』（以下〈新古典〉と略称）では、「几圭の忌日は十二月二十三日。本書刊行は安永五年九月ゆえ、前年の祥月命日でないならば、どの月かの二十三日」と注されている。だが、この注は、二重三重の誤解をふくんでいる。

几圭の忌日が十二月二十三日であれば、その「正当の日」とはその日のことでしかなく、「どの月かの二十三日」などというのはありえない。げんに几董じしん、たとえば安永四年には、「亡父正、十二月廿三日」として、まさにその日に手向けの発句をしるしている（『几董句稿』四）。ところが、安永四年の当の祥月命日の記事は、発句だけで、連句はない。したがって、本書の半歌仙とはまったく関係がないことになる。第一、安永四年は、まったく十七回忌ではないのだから、それを該当させることじたいむりがある。「前年の祥月命日でないならば（云々）」という注は無用だった。

やはり、本書刊行の安永五年のあいだで、なんらかの解決をはかる必要がある。しかし、その年の句稿には、関連記事は見当たらない。当年十二月二十三日については、日付の記載すらない。そもそも、刊行の九月二十三日時点では、十七回忌の命日にもなっていないのだ。解決の糸口になる記事は、むしろ『几董句稿』三のほうに

見える。安永三年二月のこと、日付は不明ながら、文脈からして、その月二十三日と考えられる記事である。

ことし師走は亡父が十三回の正當也。くれゆくとしの事しげきを思ひて、今きさらぎのけふ作善の志をなして

其師走と思へば余る寒さ哉

年末のあわただしさを事前に見越して、はや二月に十三回忌の追悼句を手向けようというのだ。念のため、その年の暮れ「廿三日」のところを見ると、日付だけは書かれているが、追悼句どころか、まったくの空白となっている。二月の予想は的中したことになる。歳明け早々に懸念を払拭しておいたという点で、手抜きなき、孝子としての心がけだったといつてよいだろう。

ところで、右の記事中、当安永三年は十三回にあたると書かれていた。だがそれでは、二年後の安永五年が十七回忌というのは、どうみても辻つまが合わない。「安永三年十三回忌」を基準にすると、安永七年が十七回忌になるはずである。

几圭の年忌に関して、几董が句稿のなかで営んでいる追善年次と、夜半亭の撰集中に標榜している年数のあいだで、一貫して二年のずれがある。この事実を手がかりとして、几圭の没年を考証したことがあった（拙稿「几圭の没年」『会報大阪俳文学研究会』26号）。第一撰集『其雪影』のとき、二年取り越して十三回忌としてしまった

ために——しかも、その事情は完全、秘密のままだった——、俳壇的にはそれを押し通すよりほかなかった。だから、安永五年刊の本書は、どうあっても十七回忌でならなかったし、それでこそ撰集としての筋を通したことになるのだ。句稿にしろす年忌が真正正銘であり、撰集では二年の繰り上げがはかられているということであった。

二年もの取り越しがまかり通るならば、数ヶ月の誤差は許容範囲だろう。安永五年十二月二十三日になすべき十七回忌の営み（正當より二年取り越しして）を、その九月刊行の書物のなかで果たしたことにしておくぐらいわけではない。ここでもそういう事情を押し隠して、「正當の日、誦経の後」にこの追善半歌仙をやったなどというのは、程度としては軽い架空の作り話といってよい。あくまでも現実の日程を設定しようという〈新古典〉注は、お門違いといわざるをえない。事実主義にとらわれてはならない。『其雪影』以来の、もうひとつの年忌追善方式を、やらずらして踏襲したことになる。

この『趣向』は、『統明鳥』一書をみているだけでは見えてこないものであって、夜半亭撰集の流れ全体を見通すなかで浮かび上がってくるものなのだ。そしてより大切なのは、これら夜半亭の公的な撰集が、几童の亡父追善という私的営みに歩調をあわせて編まれていることである。几童の私撰集的性格は、追善形式という枠組みにとどまらず、本集の内容にも色濃く反映している。

### 三 几童・活動の軌跡

この『統明鳥』上下二巻には、都合十二巻の連句がおさめられている。それらは、本来すべて歌仙であるべきところ、途中までの掲載であったり、そもそも満尾していなかったりで、句数はまちまちとなっている。それを一覽表にすると、つぎようになる。

上巻	春之部	1	几童ら春夜楼一門	36句
		2	月居・几童両吟	36句
		3	蕪村・樗良・几童三吟	26句
	夏之部	4	百池・几童両吟	36句
		5	霞東・几童・大魯三吟	36句
		6	几童・二柳両吟（脇起し）	20句
下巻	秋之部	7	美角・几童・定雅三吟	36句
		8	大魯・几童両吟	36句
		9	正白・松宗・道立・几童四吟	36句
	冬之部	10	晁台・几童・我則・蕪村・一音五吟	18句
		11	几童・樗良・北野・嵐甲四吟	6句
		12	几童独吟（脇起し）	18句

ただちに気づくのは、すべての連句に几童がからんでいることである。連衆は、蕪村はじめ夜半亭一門の面々であったり、大魯門下の

人びとであったり、また各地の知友であったりと、多彩である。各層にわたる、几童交際圏の広範囲なさま、また豊かさを誇るかのようである。蕪村が二歌仙に顔を出しているのは、師として当然だろう。また、大魯も同様に二歌仙にかかわっているのは、兩人の友情のあかしのように見える。これら連句を見るかぎり、この撰集が几童を中心として回っていることはまちがいない。

さらには、劈頭の歌仙に、几童門下総出であたっていることが注目される。発句に几童、脇以下に、万容・白砧・亀郷・九湖・竹裡などなど、おのが門人でかためている。これまでの几童編『其雪影』『あけ鳥』からすると、几童門のラインナップを前面に押し出した扱いになっている。

先述したように、下巻末尾は亡父几圭の十七年忌追善独吟であった。じつは下巻だけでなく、上巻末尾も同様の発意によってできている。下巻の場合と事情は異なるが、ここでもやや込み入った成り立ちになっている。

はじめに二柳の回顧談を掲げる。それは、生前の几圭と二柳の印象深い一場面を綴ったものだった。絶景を誇る嵯峨の雅因亭（宛在楼）での忘れがたい思い出と、そのときに詠まれた几圭の作を几童に語っている。その回顧談に促されて、脇起しで几童と二柳による両吟を試みたのが、この連句であった。二柳は、安永五年の夏に大

坂から上洛しているので、おそらくその折のことと推測される。几圭十七回の機を利用しながら、過ぎゆく歲月への感慨をうまく活かした作品といつてよいだろう。

こうしてみると、上巻にも下巻にも、それぞれの末尾に几圭を追憶する連句がおかれていたことになる。やはり几圭追善という几童の志が、本書編集の機軸にすえられているのは疑いない。几圭への「追善集の色は濃くない」(『俳文学大辞典』『続あけがらす』)どころか、追善こそ基本的精神であったとすべきだろう。

追善の場だけでなく、本集のそここに、几童個人が顔を出す。春之部におさめられる、月居・几童の両吟について、かつて問題提起をしたことがあった(拙稿『統明鳥』の諸問題)『会報大阪俳文学研究会』32号)。「二月十四日とみのもふけ事して」という前書を伴って、月居の「長閑さは障子のそなたこなた哉」の発句に始まる歌仙である。前書は、発句もしくは発句作者のことを伝えるのが通例である。だがここでは、脇句にまわった几童の身辺事情が述べられている。作者の役割と、前書のあり方にねじれが生じているのだ。その異例さ自体、あくまでも編者几童の立場にそった線上に、本集が成立していることを裏書きするものといえるだろう。

右拙論で引き合いに出した、美角・几童・定雅の三吟歌仙でも、ちがったかたちの異例が見られる。

「六日も常の夜には似ず」と口ずさみつゝ、美角・定雅の  
二子を訪へば

六日たつ秋のこゝろやほし祭

美角

芭蕉の発句を口ずさんで、この兄弟を訪問したのは、むろん几重である。その訪れに応じて詠まれたのが、この発句ということになる（几重側からの記述）。星合いのひと夜まえだけ、うたったのが芭蕉で、一夜どころかわたくしは、もう六日も飽きるほど待ちに待ったのですよ、と、募る気持ちを、「秋の心」という歌語を利用して詠じた作だった。それは表のこと、心底は、そんな七夕を待ちあぐねるところとともに、几重の訪問それじたいを心待ちにする気持ちを重ねていることを見逃してはならない。その気持ちがよくわかっているだけに、几重は「うすく影踏ふ月の宵過」と脇句を詠んで、だからこそ、淡い月影でもこうしてやってきたのですよ、と挨拶を返したのだ。それほどに濃やかな心情にあふれた会釈だった。

『統明鳥』という一書が、たんに几重の行動に即しているだけでなく、その息遣いまでも表わす内容となっていてと評してもよいだろう。現にのこっている「几重句稿」とはまた別仕立ての、ころの句日記とでもいうべき撰集であった。

だが、そんな私的撰集だけに終わらないのが、本書の奥行きの深さだといつてよい。

#### 四 発句と連句の構成

元禄の俳人許六は、『宇陀法師』のなかで、撰集のあり方についてこう述べている。

巻数の事、上下二冊あれば、見ぬ先より発句・俳諧と推量せらる。

上下二冊からなる俳諧の撰集というのは、発句の冊と連句の冊に分かたれていることが見ないでもわかる、というのだ。『猿蓑』や『統猿蓑』などは、その典型としてよいだろう。だが、かならずしもその型ばかりではない。『統明鳥』のように、四時を春・夏と秋冬の上下二冊に分かつことも珍しくはない。

ただ、この集の編集は、単純に春夏と秋冬に分冊されたものではなく、きわめて手が込んでいる。発句の並びと連句の位置取りにおいて、じつに変化に富む配慮がなされている。たとえば、春之部では、発句六十三句のあと、歌仙二巻、そのつぎにまた発句が四十九句、さらに歌仙一卷（二十六句まで収録）が来るといふ按配だ。春のほかの季節も、それぞれに入り組んだかたちになっている。〈新古典〉の解説でも、「構成が単調になるのを避けている」と評価されている。けれども、ただ変化をつける、というだけにとどまらない、念入りなる周到緻密さをも備えている。

春之部では、新春にはじまり、「鶯・いかのぼり・梅」などと早

春の季節が来て、次第に仲春の気分へとつながっていく。さらに進むと、几童の「日は落て増かぞ見ゆる春の水」を立句とする歌仙となるのだが、その直前の句は、無腸の「枕にもならふもの也春の水」であった。同一季節の発句を並べることによって、発句群から連句へ滑らかな移行をはかろうとしたのだろうか。また、ふたつめの連句の日付が、「二月十四日」と明記されるように、春の深まりが発句・連句のつながりのなかで感じ取れるようになっていく。

後半の発句群は、「涅槃・彼岸」といった二月の季節から再開され、「雛祭り・桃の花・桜」、そして晩春へとつづいていく。「春のなごり」などという季節まできたところで、ややあとずさりするかのように、「藤・躑躅・菜の花」といった花の句になって、一瞬とまどいを覚える。だが、その疑問はたちどころに氷解する。直後に、「菜の花や月は東に日は西に」の発句にはじまる連句がくるのだ。ここへつなぐための布石であったことになる。

同様の流れは、夏之部でも見られる。発句群が、まず「ほととぎす・更衣」で幕があくと、夏らしい景物が舞台上に繰り広げられていって、「団扇・扇」までくる。そこで、「おもふほど風なき君が団かな」という百池発句をもって、几童との両吟が展開される。さらには、発句から歌仙へのつなぎは、もっと濃やかな心配りが見られ

る。

歌仙直前は、「うき人の日影をかさす扇哉」と「扇かへて君があだ書見のみぞ」というふたつの発句であった。これら両句が、ともに恋の句であることが注目される。先掲、百池の歌仙発句も恋の句とみてよい。蕪村にも扇を恋の道具にもちいた句があるが、この発想はとくに一般的なものとはいえない。むしろ、夜半亭周辺の試作に発した、独自の詠じかたのようにおもわれる（夜半亭の句会で「扇」を題にした、探題句作も試みられている）。とすると、そういう夜半亭内の実験的取り組みの成果とも言えるだろう。また、それを両吟歌仙へのお膳立てとして利用したとみることもできる。いずれにしろ、新俳諧への意気込みと本づくりの妙味が一体となって、まことに心にくい演出となった。

夏之部の後半では、また別趣の演出が用意されている。

雲の峰高観音をはなれたり 八世長 亀友

「高観音」は、近江三井寺の五別所の一で、近松寺の別称。琵琶湖を一望のもとに見下ろせる、絶景の観光スポットとして親しまれていた。作者亀友は、大坂のひとで、大魯門。この句を、旅先から、おなじ大坂の俳友霞東に報じたいらしい。以下、こうつづく。

と聞えけるに對して

しづかさや湖水にうつる雲峰

霞東

報じられた句に応じて、霞東が詠んだ発句である。むろん旅中実見して詠んだのではなく、在庵の作だろう。折から浪花にあった几董がこれに脇を付け、それにかねらの師である大魯も加わって、三吟歌仙を完成させた。これをとり込んで、几董の旅宿中の興趣をそのまま本書に反映させた。しかも、大魯門の活動ぶりを紹介して、几董・大魯の友情をさりげなく映しだすこともなった。

下巻、秋之部を開巻すると、「七夕・星祭り」の発句が、十四句並んでいる。これは、予想を裏切る秋の開始である。秋は「立秋」で始めるのを通例とする、にもかかわらずである。その理由は、しばらくすると判明する。三節のところでは引いたように、「六日たつ秋のこゝろやはし祭」の発句による、几董と美角・定雅の三吟歌仙へと続いていく。これを誘い出すための序章として、巻頭の七夕発句群がおかれていたのだ。

そのうえ、道立以下「七夕」発句の作者連中は、几董の春夜楼か蕪村の夜半亭につながるメンバーで固められている。この編集方針を実現するために、当季題による投稿を依頼したかと思像される。同種の事例として、たとえば天明二年春、蕪村が「花桜帖」を企画した際、季題を指定した投句依頼がなされたことがある。また、如瑟に宛てた手紙では（年次不詳七月二十一日付）、「相撲」の題による詠作についてのやりとりがうかがえる。これも、「相撲」題で

の催促が背景にあったことを想像させる。七夕発句群も、同様の依頼活動の成果であったかもしれない。とすると、几董と定雅・美角、三人の交友ぶりを撰集のなかに取り込むために、かくも周到なる段取りを怠らなかつたことになる。

さらに、大魯が上洛、相国寺に遊んだときの、几董との両吟がおさめられている。そのあと、「立秋」の発句がきて、ここでようやく通常の秋之部となる。

冬之部においても、暁台門や樗良門との交流のあとをしめす連句を掲げながら、巻末の几圭追善へとつながっていく。

以上のように、発句群と連句は、つながりあい、協調しあい、またからみあいながら、有機的な構成をかたちづくっている。「単調になるのを避け」るところではない。春夜楼の俳諧活動や日常の交友関係、そして何より亡父の追善の志といった、几董個人の身にそつた事象に根ざしつつ、それが時代を代表するに足る一書としての大いさを獲得するために、かくも万全の神経が払われていたのだ。

## 五 俳諧の華

いくら綿密な計算のもとに構成された本であっても、肝心の作品の質が低水準であったなら、なんの価値もない。編者几董の一人相撲でしかない。それは、全発句、そして連句の付合、その中身を慎

重に読み解いてゆく先に、総体として価値が定められるべきものだろう。しかしながら、本稿で全作にわたって読解をしめすわけにはいかない。

前節までで検討してきた、本書の仕組みをふまえるならば、十二の連句作品がカギになりそうである。几童の折々の活発な行動力や連衆の多彩な顔ぶれを目にするにつけ、『統明鳥』の最大の見所が連句にあることはまちがいない。前集の『あけ鳥』以降になされた几童の俳諧活動が、連句に集約されているとみてよいだろう。几童じしん、それだけの仕上がりになっているはずだ、という自負もあつただろう。キメこまかな発句の配列が、連句への自然な導入をつくっていたところにも、そのことが反映している。

むろん、発句は発句で、しかるべき筋にそって配列されてはいる。先述のごとく、四時にわたって、季節の推移をできるだけ滑らかにするというのも、そのひとつである。あるいは、春之部冒頭、宋阿(巴人)・几圭・太祇・召波の順に掲出するのも、それなりのワケがあつた。蕪村の師巴人、几童の父几圭、そして江戸から京への夜半亭移徙しんに貢献のあつた太祇と召波。夜半亭撰集としての正当性をささえるに必須の名列であつた。本書にかぎらず、夜半亭撰集でしばしば、故人の作や旧作を収集させている事情も、そのあたりにあるだろう。さらに、夏之部冒頭では、蕪村にはじまって、名古屋の

士朗、樗良の高弟で伊勢の坡仄、そして暁台とつづく。ここでは、夜半門から他郷への連帯をしめすあらわれとなっている。

そういう意味では、発句を軽視するわけにはいかない。それでもなお、連句作品が本集の一番の果実だという考えのもと、本稿では、几童らの意欲を検証するうえで、連句に焦点をあてて見ていくこととする。以下では、春之部のあとの二歌仙のなかから、数点について指摘しておきたい(第一歌仙は、春夜楼お披露目の色あいが濃いので、省略)。

春之部の二番目におかれた連句は、月居・几童の両吟歌仙だった。異例のかたちになっている詞書については、前にふれたので、まず両吟の相方に登場する月居について述べる。月居は、はじめ「春面」の号で夜半亭に見参する。安永四年十一月二十日の月並句会のことだった(『月並発句帖』)。しばらくは初号で出座しつづけて、翌年の七月二十日を最後に、翌月二十二日の句会ではじめて「月居」号を名乗った。改号は『統明鳥』上梓の直前だったのだ。とすると、安永五年二月十四日成立のこの両吟は、まだ「春面」号のもとに実施されたことになるが、掲出そのことは、刊行時点の現号でなされる。

それにしても、夜半亭入門からわずか数ヶ月の月居が、本集のこの位置にくるといふのは、たいした拔擢としか言いようがない。最

初の歌仙が、几童門連衆の紹介を主目的としたもので、かならずしも質を云々するものでなかった。となると、このふたつめの歌仙こそが、内容を問われるものとなるはずである。しかも両吟である。兩人の技倆がいびつでは話にならない。よほど信頼にたる相棒でなければならぬ。それが、俳歴浅い月居であった、というのは不安すら覚える起用のようにみえる。

だが、懸念は無用であった。精読するに、まことに意欲的な付合が展開されていると評することができる。自在な着想、大胆な発想、王朝作品や謡曲・説経、さらには漢詩文の援用など、魅力あふれる付合が展開されている。数例をあげてみる。

国司の情歌に聞ゆる

月居（初ウ2）

起臥も娘なくせし涙にて

（初ウ3）

これは、前句の「国司」を土佐に赴任した紀貫之とみて、つぎに在任中に愛娘をなくした悲しみへと思ひ寄せたものとなっている。

永き暇の御恩身にしむ

几童（初ウ10）

花曇あゆみ劣るゝばかり也

（初ウ11）

ここでは、謡曲「熊野」の詞章「御暇を賜はり、東へ下り候ふべし」を手がかりとして、その物語を彷彿とさせる付合となっている。

あるいは、

雲すこし摩爺が高根にはれかゝり

几童（名ウ1）

二声ばかりほとゝぎすかかも

（名ウ2）

これは、前句と付句をあわせて、一首の和歌のように仕立てた点に趣向をみることが出来る。気になるのは、「かも」の措辞である。

「かな」でよいところ、「かも」と詠嘆する。これによって、どことなく万葉歌のしらがかもしだされていといえないか。几童に万葉集への関心があったという証拠は見いだせないが、この古代歌集に対して、そろそろ目が向けられるようになってきた時代であった。そんな時代の匂いを鋭敏にかぎとった付けといつてよいだろう。そして、挙句にいたる巻末はこうつついでゆく。

花と紐とく白氏文集

月居（名ウ4）

桜陰小町が姉の名をとはん

几童（名ウ5）

あさちが原に春の手枕

（名ウ6）

王朝時代によく読まれた『白氏文集』から、「小町」＝小野小町を連想するだけなら奇技ともいえないが、「小町が姉」としたところにヒネリが利いている。そのうえ、「名をとはん」と問いかけの句になっているのが、やや挑戦的にみえる。

その問いかけに応じたのが、この挙句だった。前句の「小野が姉」から、『古今集』所収の当人の歌、「時すぎてかれ行く小野の浅茅には今は思ひぞたえずもえける」が想起され、挙句の「あさちが原」は、その歌から引き出されたわけである。じつはこの付合の根幹に

は、其角の「いざさくら小町が姉の名はしらず」（五元集）があった。「名はしらず」の向こうをはった問いが、「名をとほん」だった。そして、「あさち」と女性らしい名前でもって応じたのだ。いかにも俳諧らしい機転の利いた応答に仕上げたと評してよいだろう（このあたりの解釈は、〈新古典〉のそれと見解を異にする）。

そんな刺激的な付合を、この挙句におよんでやってみせるというのは、そのこと自体驚くべきことだ。こういう機知に富んだ付合は、おおむね几童の側に認められ、第一にかれの力量を評価する必要がある。だが、それも月居という触媒があったからこそであって、その意味では、恰好の相手を見いだしたといってもよい。キャリアの長短や年齢の長幼は、とるに足らない問題だった。それは几童の師蕪村がかつて、月居と同様の立場にあった几童を正當に評価して抜擢したのと、軌を一にしていることである。

さて、春之部の掉尾をかざるのが、「菜の花や月は東に日は西に」を立句とする、蕪村・樗良・几童による三吟歌仙である。原典である几童俳諧ノート『宿の日記』（文久二年写。松字文庫蔵）によると、安永三年三月二十三日に興行された。「宿」とは几童の春夜楼のこと、また「即興」とあるので、付け直しなどではなく、蕪村と樗良を几童亭に迎えて、即日になったのがこの歌仙であった。その三吟歌仙が、『統明鳥』に再録されたわけである（小異が存するが、

ここでは不問に付す）。

ただ、記録上は満尾したにもかかわらず、『統明鳥』では二十四句までの収録となっている。なんとも中途半端な句数で、この数に意味でもあるのかといふかられるが、どうも春之部の紙数が尽きたという、単純な理由でしかなかったようだ。他の箇所でも似た例があり、また逆に、未滿に終わった事情を明記している場合もある。

ここでは製本上の理由以上のことは、思いあたらない。とはいっても、製本上の調整ならば、これ以外の二歌仙でも、あるいは発句の削除ということでも可能であったわけで、蕪村・樗良という当代を代表する俳人との成果を、こんなかたちでチョンギルというのは、やはり不審がのこる。現時点では、疑問を呈するにとどめる。

前年の『此ほとり』が、上落したばかりの樗良を迎えて四歌仙を世に問うたもので、蕪村にとつてもすぐぶる納得のいく連句集となった。おなじ樗良と巻いたこの連句も、同様の満足感を得たにちがいない。では、この付合のいずこに、かれらの技倆のさえをみればよいのか。ここでは二箇所を取り上げて指摘しておきたい。

簑着て出る雪の明ぼの

几童（初才6）

仁和寺を小松の里と誰かいふ

蕪村（初ウ1）

恋しき人の馬繫ぎたり

樗良（初ウ2）

最初の句は、雪の降り積もった明け方に、わざわざ簑を身に着け

て出かける風狂の士を詠んだものである。まるで、『金々先生栄花夢』の主人公の出で立ち(挿絵)を見るかのようにである。ただし、この著名な草双紙の刊行は、本歌仙の翌年であった。

次句は問題である。一句の意味は、御室仁和寺を小松の里というのは、いったい誰が言うようになったのか、といったものだろう。諸注の言うとおり、小松の帝とも呼ばれる光孝天皇にちなんで、仁和寺一带を小松の里というところから、この句が発想されたにちがいない。だが、どうして「簀着て」の前句から、仁和寺や小松の里が出てくるのか。

最新刊の『蕪村全集』第二巻(連句)の注に、さりげなく『古今集』の和歌に言及してあるが、いま詞書もふくめて、〈古今歌〉の全体をかかげる。

仁和のみかど、親王におましましける時に、人に若菜たまひける御うた

きみがため春の野にいでて若菜つむ我が衣手に雪はふりつつ  
仁和の帝、すなわち若き光孝天皇が、雪の降るなかを出かけて若菜を摘んだ、そのときの歌というのだ。こうしてみると、前句の簀着て雪のなかに行く人物を、若菜摘みの仁和帝と見た付筋が透けて見えてくる。そして、みかどらしき人物に簀を着せて、いわばやししの姿としたところに俳諧的ヒネリが認められる。前句の「雪」の

一語に着目して、そこからひとつの和歌世界へと展開する手法は、蕪村たちのいわば得意技であった。

つぎの句は、表現としては、謡曲「通小町」の有名な一節、「馬はあれども徒歩はだし」を借りながら、その実、『平家物語』巻七の、「幼少にては仁和寺の御所に、童形にて候はれしが(云々)」から、平経政についての物語を思い寄せたものだ(『座の文芸蕪村連句』)。男色の恋句となる。思いがけない転回である。樽良の発想力が如実にあらわれた付合といつてよいだろう。

つぎに、『統明鳥』では掲載されなかった、巻末のあたりから拾ってみる。

露しもの古傘も捨かねつ 蕪村(名ウー)

かねを春日の里へ宿がへ 樽良(名ウ2)

起いで、落首よみくだすおかしさよ 几重(名ウ3)

まず「露しもの」の句を、使い古しの傘ですら捨てかねるほどの、極貧の生活ぶりとみて、付句では、窮まって金を貸してもらいに春日の里へ宿替えるのだとした。「春日の里」といえば、ただちに『伊勢物語』初段が思い浮かぶ。

むかしをとこ、うひかうぶりして、奈良の京、春日の里にしるよしして、かりにいにけり。

〈伊勢〉では、奈良へ「狩りに」行ったのだが、それを「借りに」

行つたとすりかえて、それをこの発想の根源においた付合。哄笑味に富んだ、心にくい付け味といえる。

庄巻は、そのつぎの几童の付けである。石川真弘氏の指摘のとおり、まずは「奈良の早起き」という俚諺を援用している（『蕪村の俳諧——「菜の花や」の巻』『大阪樟蔭女子大学論集』38号）。だが、それだけでなく、前句が〈伊勢〉の初段なら、今度はその第二段で行こうとしたらしい。初段の奈良の京を離れて、いまの京（平安京）に男は移る。そして、その段の終わりで男が詠んだ歌はこうだった。

起きもせず寝もせて夜を明かしては春のものとしてながめくらし  
つ

「起きもせず寝もせて夜を明かし」た、その朝「起いでゝ」詠んだのが、和歌ではなく、「落首」だったというのだ。しかも、「かねを春日の」の前句が、その「落首」そのものだともての付けとなっている。そして、主人公は、「おかしさよ」と満足げに落首の出来映えにうなずくのだ。いい気なもの、というほかはない。

わくわくするような、心おどる、まことに生きのいい流れが展開されている。名残裏という場に至って、なお穏やかに言い納めようという気分はなく、発意旺盛にして、付合の気合いを競うかのような。樽良の洒落つ気を、おなじ〈伊勢〉の世界で受けとめながら、それを洒落のめすという几童は、さらに上手うまを行っているよう

にみえる。樽良が付けた〈伊勢〉初段の糸口を、次段で広げてみせるといふ手腕は並みのものではない。なにゆえ『統明鳥』にこの連句が完全収録されなかったのか、いっそうの不審を覚える。いずれにしろ、これらを目にするにつけて、師の蕪村がこの弟子にかけた期待の大きさが了解できるというものである。

## 六 花と実

撰集というと、とかく発句に目が向きがちになる。たしかに連句の評価は容易になしがたい。ぎやくに発句の名吟は口の端にのぼりやすく、また人口に膾炙することも稀でない。だが、俳諧の真髄はなんとといっても連句にあり、撰集の真骨頂は連句に求めるべきだともいえる。垣間見た程度ではあったが、前節に取り上げた作例など、蕪村派俳諧の技倆のほどをうかがうに、最適の付合といつてよいものだ。蕪村の折々の手紙に、連句への自信をのぞかせることがあったが、自負に恥じないものを示しているといつて差し支えない。花も実もある撰集、着想の自在さと表現の新奇性、いずれをとつても、時代を抜きんでる出色の出来を、まさにここに見るおもしろる。

道立の三丁にわたる長大なる序文は、おそらくそれらのことを言わんとしているのだらう。この序文は「丙申之秋」にしるすとある

ので、刊行直前に執筆されたと考えてよい。となると、本書の原稿なり清書なりを見たうえで、その内容に思いをめぐらせ、ときに集中の作品に共鳴しつつ、文章を繰ったにちがいない。この序文のなかに、全体的な特徴や意義について、筆者の理解・評価のしかたがうかがえると判断してよいだろう。

この序文は、長文というだけでなく、ひろく和漢の詩歌を見据えた悠大さをそなえている。筆者の識見をうかがうに足るのみならず、その文章力の並々ならぬさまを知ることができる。細部の措辞はさておいて、全体は、『新古今和歌集』の仮名・真字の両序を枠組みに用いて、縁取られるかたちになっている（先掲の拙稿『統明鳥』の諸問題）。

〈新古今〉序を駆使することによって、まるで宝石をちりばめたような、きらびやかな文体が繰り広げられることになった。だが、文章をかざるためだけに、〈新古今〉を利用したわけではない。道立なりに俳諧の要諦を説くことをめざして、これだけの文体と技法が用いられたというべきである。

序文の中心をなす俳諧論議は、来客との問答という形式ですすめられる。本稿で、その議論の詳細に立ち入るとまはないが、注目すべきは、論客があげつらう際、しばしば支考の俳論が引き合いに出されることである。「俳諧の虚実」「花実配当」「向上の一路」「俗

談平話」などといったことばは、支考の『統五論』や『俳諧二十五条』の諸条を念頭において書かれているようである。とりわけ、「支考が所謂はいかひの虚実は我いまだしらず」という一文は、支考流を明確に意識したものといえる。そうした支考流の考えにたいして、単純な肯定も否定もおこなわれていない。支考流用語を議論のきっかけにしようという意図であったようにもみえる。

ただ、傾向として、目を引くような、華やかな表現を評価する向きがあるといえる。たとえば、李白の「白髪三千丈」や、素性法師の「血の涙落てぞ澆つ」といった大仰さにこそ、風雅の「義諦」が存すると説く。「酔中の誠」とでもいふべきものだという。あるいは、漢詩の倒装句法に言及して、こういう特異の技法にこそ価値があるのであって、これをふつうの語順にすればなんの感興もないとも述べている。また、「一句の精神、一二字の字眼にある」とも説いている。

これらを総じて言うと、支考流の「華実相応」とか「俗談平話」よりも、「鶯鷲」のごとききらびやかさ、「渚の玉」のごとき清らさを尊ぶ傾向にあるといえる。だからこそ、本書の『華』をたたえるに、〈新古今〉序の修辭をもつてしたのだった。これは、さきに見たような、連句における大胆な発想、目ざましい表現に向けられた評価としてもよいだろう。

この傾向は、蕪村の考えと通じるところがある。

麦林・支考、其調賤しといへども、工みに人情世態を尽す。さ  
れば、まゝ支・麦の句法に倣ふも、又工案の一助ならざるにあ  
らず。

〔春泥句集〕序

支麦流に対して、「賤し」という否定的評価をくだしつつも、人  
情世態を巧みにすくいとするわざは、句作の助けとなることもあると  
いう見解を示している。同様の発言は、「取句法」にもみることが  
できる。これは、句会の際に壁書として掲げられたものというから、  
蕪村門の面々には周知だったといつてよいだろう。

また、「世にもてはやす蕉門とやらむ、質をもはらにするにもあ  
らず」〔平安二十歌仙〕蕪村序〕という文辞も残されている。ここ  
にいう「蕉門」とは、支考の美濃派や伊勢派、あるいは蝶夢系など  
をさす（田中道雄「蕉風復興運動の二潮流」『蕉風復興運動と蕪村』  
所収）。そういう「蕉門」の質朴主義に批判的であったことがわか  
る。同様の見解は、手紙のなかでたびたび披瀝されているので、や  
はり夜半門では常識に属することからであっただろう。

蕪村のさまざまな発言を総合すると、道立の考えと大きな径庭は  
なかったといえる。『統明鳥』についての評価は、蕪村と道立にお  
いて通じるものがあつたとしてよい。質朴ではなく、表現の華麗を  
求める方向についても、共通のものであろう。

蕪村は、この『統明鳥』の出来映えに關して、編者几童に宛てて  
こんな手紙を送っている（安永五年八月二十七日付）。

明鳥、見申候。至極よろしく候。御返却いたし候。御清書にか  
ゝり可然候。

ここにいう「明鳥」は、『統明鳥』のことをさす。「至極よろしく  
候」というのだから、蕪村も大満足のいくものだった。原稿の段階  
で、師匠のお墨付きをもらつたうえで、几童は清書に取りかかつた  
らしい。

発句・連句とも、蕪村の流儀になつた出来映えであり、また編  
集についても、夜半亭の名に恥じないものとされたのだろう。几童  
の私的な句日記のような性格を有しつつ、作品一つひとつの出来、  
そしてそれらをうまく組み合わせた構成、この作業が全体として、  
夜半亭の成果を具現するものとなりおさせた。もと几童の身にとつ  
て仕上げられていったこの撰集が、同時に夜半亭一門の顔をもつも  
のとなつた。几童個人から発したもののが、同門の連衆全体の共有財  
産となつたのだ。それは、「昇華」ということばで評するにふさわ  
しいだろう。上田秋成はこの手際を目にして、跋文で几童のことを、  
「今の世にたぐひなき」才の主とたたえたのだった。

（ふじた しんいち／本学教授）